

何も思いつかない。

パソコンを前にして、私の十指は鉛だった。急激に日に焼けた手の甲は錆びた鉄のようで、前書きばかりが得意なはずの脳みそはドレープみたいに溶けている。

一ヶ月の長旅で得た大量のインプットが整理整頓されないまま散らかっているものだから、その向こうにある言葉の引き出しが開かないのだろう。桐の葉棚のようなそれを前に、伊勢の祭で声が枯れるほど叫んだ「エンヤー」という声が時折遠くこだましている。

書きたいことは沢山あるが、それが有機的に繋がらない気持ちの悪い感覚があるのだ。しかし締切は迫っているので書かなければ仕方がない。

自分の非力が業腹だが、とにかく、計画性なくタイピングを始めようと思う。

木を見て森を見ずという言葉があるが、森ばかり見ていると実はそこにある木の植生に気が付かなくなってしまう。ということを今日、新宮の浮島の森を見て思った。

浮島は外から見ると水堀の中にあるこんもりした普通の森のようだが、中に入ってみると泥質の薄い土の上に重なり合うようにして寒暖両性の植物がひしめき合っている。樹木の表面にはミズゴケの丸い葉っぱが並んでいる、と思ったが後で調べるとシダ植物だった。

フィールドワークもそれによく似ている。今回は代表の勧めもあり、敢えて森をほとんど見ずに現地入りした。一つ一つの枝葉を丁寧に見たい、つまり暮らしを見たいのだと彼は言った。では、暮らしを見るとは一体どういうことなんだろう。これが今回の私の問いになった。

フィールドワークで最も重要なのは食である。というのは食いしん坊大臣こと私の持論だ。

2日目に店で怖気づきながら頼んだのはイルカとクジラの刺身だった。ジビエのような生臭さを想像していたが、なんてことはなく驚くほど美味い。

イルカの腹は牛肉のカルパッチョとマグロの赤身を合わせたような味がした。新鮮な馬肉によく似ているけれど、それよりも魚っぽい清廉さがある。臭みは全くないが、生姜、大葉、レモンと合わせると濃厚さが鼻先から昇華されるかのように軽く食べられる。

クジラの顎はエリンギの軸の部分に似た歯ごたえがあるが硬くはない絶妙な食感がした。噛んだ感覚はイカなのだが、その後すぐじゅわっと爽やかな油がとろけだして来る。すぐ飲み込まずに舌の上に乗せてそれを堪能する。

住民に聞けばこれらはよく食卓に上がるそうで、それぞれが一番オススメの部位と食べ方を持っていた。まさに生活に根付いた食である。こんな美味しいものを食べられるなんて羨ましい。

そんな浮ついた心は3日目で足止めを食らうことになる。

3日目、まず向かったのはくじらの博物館だ。

イルカが尾鰭だけでぴよぴよ泳ぐショーを皆ではしゃぎながら見る。彼らは思った以上に頭が良くて、確か人間の5歳児くらいの知能があるんだよなと思い出す。伊勢で仲良くなった5才児のことを思うと完全に理性ある生き物なんだなと感じつつ、彼らの曲芸を消費していた。彼らが例えショーを遊びとして楽しんでいたとしても、やはりそれは画面越しのような遠さがある。昨日食べた刺身を思い出して、テレビの向こうと自分の身体が繋がらないような感覚がした。

可愛くて賢くて美味しいなんて、最高だし、馬に似ている。

よく考えると、人間と共に暮らして人間に絶対必須のものとして育まれ生きてきた馬と、特に必要はないが見せ物と食用のために大海原から連れてこられたイルカでは意味が違うのかもしれない。でも、太地の人にとってクジラやイルカは馬なのかもしれない。

吹きすさぶ海風の冷たさに3月公演の不安を感じながら展示室へと戻る。二階の標本コーナーにはクジラの各パーツのホルマリン漬けがあった。

とにかく巨大である。木の幹みたいな心臓、大岩のような睾丸。その向こうを見て背筋が冷たくなった。

目のホルマリン漬けだ。

気孔のような分厚い瞼の奥は伽藍堂なはずなのに、何もかも見透かされ、自分は絶対に勝てないと思えてくる。生物でありながら現象でもあるようで、神殺し的な禁忌さを感じさせる。そんなジャイアントキリングを生業としていた漁師とはどんな存在だったのだろう。どんな気持ちで、この一つの自然の死を見届けるのだろう。

活動家たちがこれをfeel badだと思ふ気持ちもとてもよくわかった。(feel badはヴィーガンの親友が肉を食べない理由として言っていた言葉だ)。家畜のような人間の食糧システムに完全に導入されている訳でもなく、ジビエのように人間の生活を脅かしているわけでもなく、“金儲け”と“珍味”のために今でもこの巨大な知性生命を殺しているというのはたしかに絶対に許せないと思う人はいるだろう。ただ、クジラが普通にスーパーに並ぶ街で、地元の人はその血肉にして生きているわけで、外部者がそこを否定するというのも変な話だ。それに、何であろうと生き物を殺し食べるのはエゴではある。それでもなお、今、捕鯨をすることに何の意味があるんだろう。と、冷静で冷淡な誰かが思考の海に石を投げ込んだ。

様々な考えが浮かんでは消え、テーゼとアンチテーゼが逆説を繰り返す。

はりつめた、処理しあぐねる気分と共に南極さんの家へと向かった。

外は大時化である。

南極さんは穏やかでシャキッとした人だった。目を見て、魅力的な人だなと思った。質問すれば、なんでもよく話して沢山のことを教えてくれる。

「皆漁師魂でやる」

「命を奪うから笑い物にはできない」

「捕る時は顔つきがかわる」

「遊んでとれるものじゃない」

「生活がかかってるからできるだけ」

「生活がかかって必死だから怖いとも思わない」

どんな気持ちでクジラに向き合っていたのかを聞きたくていくつかの質問をしたが、彼は想像以上に真摯でシンプルで真剣だった。

武勇伝を自慢するようでもなく、情緒的に物語るわけでもなく、ただひととせを夢見るような口ぶりだった。

出航したら入港までが一日みたいなもの。帰って太地の灯台を見てもそんなに感動しなかった。

そう話していたから本当にあっという間の日々だったのかもしれない。クジラを追いかけて追いかけて地球の二極まで旅をして、船酔いと寒さの中捕ることだけを考える。張り詰めた弦のような生活だろうに、写真に映る彼はスマートで澆刺としていて、仲間達は頬を赤くして笑っていた。

今何をしているのかと聞けば、何もしていないと彼は言った。棚に飾られた結婚記念の透明な時計を確認して、なんとなく予感がしつつも奥さんのことを聞けば、少し口ごもってからもう亡くなったと仰った。今の時間は彼にとってどれほど長いだろうか。緩んだ弦から響くのは彼にとってどんな音だろうか。

一瞬、小さい子が頬を叩かれた時のような無防備な声がした。気のせいだったのかもしれない。けれどすぐ続くように「行くんだね」と静かな声がしたので、それは多分彼から発せられたのだと思う。彼はそれ以上何も言わなかったけれど、私は身勝手にも色々な想像をして、少し泣きそうになった。後ろ髪を引かれながら大雨の屋外へと踏み出す。

[illegible]

聞き取りやすいようなんびり高い声を出し牧歌的な笑顔を浮かべながら、優しい彼らと楽しく交流する。それはあたたかな時間だけれど、ひよんなことでどちらも大怪我をする巨大な爆弾を二つ抱えているような、緊張を常に孕んだ時間でもあった。

死ぬかもしれない町に住むこと。その重さと、美しい自然が持つ冷徹さを、初めて身にしみて感じた気がした。

暮らしとはなんだろうか。

食や、住まいや、仕事によって形作られるものだ。多分この三つは結構大切だと思う。

そして、それらを包括して、どんな空間と時間に生きているのか？ということなのだと思う。

かつてこの町を潤わせた捕鯨船は、物見台から遠い地平を見て、半年を一日だと感じるような遠い未来を見据えていた。

そんな過去と、密集した集落で海が見えず、海拔0m地帯で必ずくる地震を知らながら今日を暮らす今。時間がぐーんと伸びる長閑さの中で、昔と同じ長さを見ているようで、実際目に入っている距離はまるで違う。

地続きのようで断絶のあるこの時間と空間の歪みは、すりガラス越しのように曖昧で夢のように近くて遠い。

ガラスの向こうで、誰かがくぐもった声でうたっている。古い歌だ。

色は青いけど、多分あの子は白い服を着ている。赤色もちょうぴり見える。

巫女服だろうか？それとも港の色？それとも血を流した鯨だろうか。

ふと浮かんだそんな情景は、何を指し示しているのか分からない。またいけば分かるだろうか。多分わからないだろう。

この文章を書くのは本当に苦しかった。普段なら用水路に流しっぱなしの源泉くらい無駄に湧き出てくる言葉が、胸から脳から指へと行くまでに何度も何度も引っかかった。

色々な正しさに直面して、思いが湧き出て、自己矛盾が繰り返された。

この町を表すには、かきことば以外を使うのが適切なのかもしれない。自分一人では出てこない表現が必要なかもしれない。だからきっと、私は一人ではなくここに来たんだと思う。

いい町だ。